

氏名	中江 早希
ヨミガナ	ナカエ サキ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第304号
学位授与年月日	平成30年3月26日
学位論文等題目	〈論文〉 ハンス・アイスラーを「今」歌うということ ―政治と歌曲の間で― A. シェーンベルク作曲「6つのオーケストラ伴奏歌曲」op. 8より（室内楽版） Natur 詩：ハインリヒ・ハルト Sehnsucht 詩：子どもの不思議な角笛（Des Knaben Wunderhorn） Wenn Voglein klagen 詩：フランチェスコ・ペトラルカ 〈演奏〉 Kurt Weill： Berlin im Licht Song Es regnet Nanna's Lied Wie lange noch 他
論文等審査委員	
主査	東京藝術大学 教授 （音楽学部） 佐々木 典子
副査	東京藝術大学 教授 （音楽学部） 檜山 哲彦
副査	東京藝術大学 准教授 （音楽学部） 甲斐 栄次郎
副査	東京藝術大学 名誉教授 勝部 太
副査	明治学院大学 専任講師 （文学部） 和田 ちはる

（論文内容の要旨）

本論文では、『ハンス・アイスラーを「今」歌うということ——政治と歌曲の間で——』という題目で論じていく。ハンス・アイスラーは幼い頃から貧しい生活を強いられていた。父は哲学者、母は労働者、兄と姉は次第に政治に関わる活動をしていたため、アイスラーも幼い頃から政治や労働者階級との関わりが自然と出来ていたのである。そしてアイスラーは、「政治と音楽」の融合を考え、音楽活動しながらシェーンベルクのもとで作曲技法を学んでいた。

しかし、「政治と音楽」の関係性についてシェーンベルクは、「我々音楽に生きるものは政治には場を持たない。政治を本質的に異なるものとして考えなければならない」という信念を持っていた。このことから、アイスラーはシェーンベルクと決別し、独自の道を歩み出した。

私かというと、元々はシェーンベルクの「政治と音楽」の関係についての考え方に賛成であった。政治と音楽（芸術）は適度の距離があったほうが、過激にならず平静を保つことができるので、芸術作品はいわば現実逃避で良いと思っていた。だからこそ、アイスラーはどのような気持ちで作曲していたのか、また、アイスラーが生きていた時代が、差別や貧困もなく平和な世の中だったなら、どのような音楽になっていたのかと興味を沸いたのである。

第一章では、ハンス・アイスラーの音楽の原点として、アイスラーの生い立ち、シェーンベルクと対立し決別してしまった理由、そして、決別してから書かれた《新聞の切り抜き》op. 11 のアイスラーの特徴と、「政治と音楽」の融合を意識しながら当時、どのような活動をしていたのかを述べていく。

第二章では、ハンス・アイスラーの歌曲について詳しく述べていく。アイスラーの音楽活動で欠かすことの出来ない詩人のベルトルト・ブレヒトとの関わり、アイスラーと同世代の作曲家であるシェーンベルクとクルト・ヴァイルの生い立ちと曲の比較をし、アイスラーの特徴を際立たせていく。そして、1933年に亡命を余儀なくされたアイスラーの動きと亡命時代に書かれた《ハリウッド歌曲集》についてどのように作曲されていたかを述べていく。

第三章では、《新聞の切り抜き》より、特にアイスラーの特徴が分かる3曲の楽曲分析と、亡命中に書かれた〈自殺について〉の楽曲分析をしていき、亡命前と亡命中に書かれた曲の特徴の比較をしていく。

第四章では、声楽家がアイスラーの歌曲を歌うにあたっての最も良い方法を論じていく。

アイスラーだけではなく、他にも「頽廃音楽」のレッテルを貼られた作曲家たちがいるが、彼らの作品の多くは演奏されないまま今も取り残され続けている。これらの作曲家や音楽との出会いが、演奏家としての表現の幅をさらに広げてくれたと私は実感している。この論文を読んでもくれる演奏家に今後演奏し活動していく中で、発展への道標になることを願い、この論文を記した。

（総合審査結果の要旨）

本論文は、「ハンス・アイスラーを『今』歌うということ―政治と歌曲の間で―」というテーマで論じられている。現在、アイスラーの師であるシェーンベルクや同弟子のヴェーベルンの作品は良く取り上げられるが、アイスラーの作品を特に日本で演奏される機会は少ない。申請者は、アイスラー作品の魅力を歴史的背景をもとにまた、その時代の流れの中でアイスラー自身の考え方がどのように変わっていったのかを、少ない資料と、また同時代にの作曲家の作品と比較しながら、伝えようと試みている。テーマの政治という観点から、少し左翼的な思想論を論じるのかと危惧されたが、そうではなく、あくまでアイスラーの音楽をもとに書かれている。戦争や亡命というような環境では全くない現代に生まれ、ニュースや映像でその悲惨さを見ることはできても、ハンス・アイスラーのようにその時代に実際に生いた人間から発せられるメッセージを何とか受け止めようとしている努力、そしてそれを単なる反戦歌として捉えるのではなく、あくまで芸術作品としての価値を広く広めようとされていた。アイスラーの作品を愛するがゆえに少し偏った思いが見受けられるところもあるが、それだけこの作曲家の作品の良さを世に語っていけるのかもしれない。

演奏においては、博士リサイタル第1回目より、単なる演奏会の形ではなく、より聴衆が様々な角度や、実際にドイツ語のテキストがわからなくても、その音楽の世界に入り込めるよう、演技映像などの工夫をされていた。第2回目より、音楽と映像のコラボレーションを試み始めたが、今回の学位審査演奏では、音に映像が反応して動くなど、更なるチャレンジが

あった。また、演技面においても、第2回めよりもっと表現力を増していた。しかし、予算的なこともあるだろうが、映像の二次元的世界と演技三次元的空間の隔たりを少し感じ、今後に向けては、改善が必要と思われる。アイスラーの音楽は、やはりテキストの深さを表面的に感じるのではなく、そこにいる聴衆の各々が自身の魂にしっかり受け止めていくのではと思われる。しかし申請者の、多くの聴衆によりわかりやすく、より親しみやすくという試みはとても真摯で素晴らしかった。また演奏内容は、まだ日本語の母音の動きの特徴でドイツ語の母音を歌ってしまうところもあり、これだけの高度なレベルに達している演奏ができていたので、残念なところもあったが、アイスラーをこれだけ表現し演奏できる演奏家は、日本にはなかなかいないと思いました。博士学位論文、博士学位演奏ともに学位を授与するに充分ふさわしいと判断され、合格と認められた。